
野田さん家の3兄妹

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野田さん家の3兄妹

【Nコード】

N0214Q

【作者名】

橙

【あらすじ】

野田家の3兄妹は、頼れる長男の基夫、完璧超人の明彦と、その双子の妹である、私。
仲は、まあ、いいとは思うけど……？

ファンタジー要素を含む、兄妹とコンプレックスをテーマにした青春ものです。

序（前書き）

ごく僅かですが、兄妹間の恋愛感情を思わせるような描写があります（話自体は恋愛ものではありません）。
苦手な方はご注意ください。

序

玄関先で、私は泣いていた。星のよく見える夜のことだった。

傍らにはアキが座っていて、背をさすってずっと私をなぐさめてくれていた。けれど私の泣き声が、忙しない嗚咽に変わる頃には、ただ黙って隣にいただけだった。

そもそも、お母さんに叱られたのは私だけだった。アキが怒れることなんて、ほとんどない。私だけがしょうもない癪癢を起こして、お母さんに家から叩き出されたんだ。何をそんなに怒られたのか、細かい原因はもう忘れた。何歳だったかも覚えていない、小さい頃の記憶だ。

右肩に柔らかいアキの体温を感じた。私の顔は涙と汗でべとべとになっていて、手でこするせいで熱く火照っていた。アキが隣にいることが心強かったのに、同じだけぐしゃぐしゃな顔を見られなくて、「どこか行ってよ」と、つつけんどんに言ったのだ。

「ここにいます」

膝を抱えたアキは、静かにそう言った。

「めーこと一緒にいるよ」

穏やかなアキの声がささくれた気分に沁み込んだので、私はそれ以上アキを拒まなかった。ひりつく喉から、しゃっくりの合間に声を押し出した。

「でももう、ご飯の時間だよ。お母さん呼んでるよ」

「ここにいます」

アキはきっぱりと言い切った。私は顔を上げた。

「でも」

「ずっと一緒にいるよ。めーこがさみしくないように」

アキはにっこり笑って、空を指差した。

「ほら、今日は星がすごいねえ。たくさん見える」

つられて私も空を見上げた。おそらくそれは、私を泣きやませるための作戦だったのだろう。まんまと引っかけた私は、ビーズの袋をぶちまけたような星空に、ぽかんと口を開けた。

「ほんとだ、すごいねえ。これ、アキがやったの？」

「うん」

アキはなんでもないというふうに頷いて、「でも、内緒ね」と人差し指を口に当てた。

「内緒なの？」

「うん。でも、めーこだけには教えてあげる。ずっと一緒にいるって、言っただしょ」

涙が引っ込んだ私は、きょんととして首を傾げた。

「ずっとって、夕ご飯まで？」

「ずっとはずっとだよ。でも、ご飯も食べよう」

アキはぴょんと勢いよく立ち上がった。袖でごしごし顔をこすってから、私もゆっくり立ち上がった。固い階段に座っていたせいで、おしりが痛くなっていた。

「そうだ、もう1こ、僕たちだけの秘密ね」

アキは私の手をとって、ぎゅっと握った。もう一方の手は、また空を指差していた。

「秘密？」

「うん。めーこにしか言わないから、内緒にしてね」

「うん」

内緒話に、私はわくわくした。秘密、という言葉のもつ特別な響きにすっかり夢中になった。アキの指先をたどって、プラネタリウムよりもすごい空を見上げた。

アキのひそめた声が、すぐ耳元でする。

「僕はね、実は――」

1・アキと私(1)

まだだ。本日何回目だろう。

私は冷めた気持ちで、目の前に差し出された袋を見下ろした。

数種類のクッキーを詰めた透明な袋には、薄い水色のリボンが巻かれ、小さなメッセージカードもついている。カードには金色にきらめく「Happy birthday」の筆記体の文字。とにかく気合いの入ったラッピングだった。笑顔でこのプレゼントを渡そうとする、彼女の本気が窺えた。

「ありがとう。嬉しいなあ、これを私に？」

白々しく棒読みでお礼を言った私に、彼女は怪訝そうに眉をひそめた。おそらく、何を言っているかわからないだろう。

彼女は見知らぬ後輩だ。確か、友達の部活の後輩。あまり関わったことのない人に「は？」という顔をされるのは、結構傷つくものだ。私の嫌味は嫌味とも気づかれず、彼女の「違います」という言葉であっさり叩き潰された。

「アキ先輩へです。アキ先輩に、渡してください」

よろしく願います、と頭を下げた彼女は、そこでやっと問題に気づいたようだった。しまった、と言わんばかりに頬を引きつらせ、恐る恐る上目づかいで私を窺う。

隣に座る仁美の肩が、ぷるぷる震えているのがわかった。爆笑したいのを、寸前で堪えているのだ。

プレゼントを私に預けた彼女は、申し訳なさそうに口元に手を当てた。

「すみません。明子先輩も、今日が誕生日なんですよね」

「死ぬかと思った」

ひとしきり笑った後、仁美はしみじみとそう言った。

アキへのプレゼントを預かるのは、手紙だけの人も含めて、本日これで6人目だ。クッキーを持ってきた2年の女の子は、ちょっと気まずそうな顔をして帰って行った。

でも気まずいと思ってくれるだけ、まだましだろう。うんざりして、私はだらしなく机に突っ伏した。

「もう嫌、アキにばかり。私へのプレゼントなんて1コもないのに」

「双子だつてこと、皆忘れてるんじゃない？」

仁美が面白がつてにやにや笑った。私は思い切り顔を顰める。

「都合良すぎる。利用するだけして。私って一体何？」

恨みごとは尽きない。けれど腹立たしいより、またか、とうんざりする気持ちの方が強かった。こういう扱いを受けることは、慣れている。

アキ　明彦と私は双子の兄妹だ。18年前、この5月のまさに今日、1時間くらいの差はあれど、ほとんど同じタイミングで生まれた。

けれど私とアキは、何一つ似通うものがない。全然違うのだ生まれもったものが。

仁美はちよつと困ったように眉を下げた。

「まあ、ねえ。会長なら、仕方ないかもね」

言葉から同情がにじんでいる。

その通りだった。「仕方ない」。そうやって受容して、諦めてしまふ以外方法はない。それくらい、アキは全てにおいて優れていた。

私の双子の兄、野田明彦といえ、おそらくこの学校で一番有名だろう。これは、根拠のない身内びいきでは決してない。

まず、成績優秀。テストの順位は公表されないけど、私はアキの

成績表をこっそり覗いたから知っている。あいつは、どの教科でも10番以内に入っていた。おまけに生徒会長をやっているから、先生からやたら頼りにされている。厳しいことで有名な先生と、仲良さそうに話している姿を見かけたことがあった。

次に、運動も得意。アキの趣味はジョギングだ。毎朝、私より2時間は早く起きて走っている。私には変態としか思えない行為だ。中学まではサッカー部だったから、球技大会や体育祭ではクラスを中心に大活躍している。アキの出る試合は、女子の応援がどっと増えるから、すぐにわかるのだ。

そして、これがおそらく最も重要なことなのだろうけど、アキは非常に顔がよろしかった。

きりつとした二重まぶたの瞳、すつと通った鼻筋、形の良い唇。笑えば爽やかに白い歯がこぼれる。妹の私から見ても、眩しいほどの顔立ちだと思う。きれい、という表現を男に使いたくないけど、やむを得ないくらいだ。

数学の問題で、コインを何回か投げて表が出る確率を求める、というものがあるだろう。それで言うならアキは、途方もない確率を乗り越えて、ずっとコインの表が出続けたのだ。いい要素を集めたら、アキの顔ができる。そしてきつと、コインの裏が出続けたのが私だ。

アキのまぶたは二重で、私は奥二重。お母さん譲りの柔らかな髪はアキへ、お父さん譲りのごわごわな直毛は私へ。うちの家族は皆、割と顎が細くてすつとした顔立ちなのに、おばあちゃんからの隔世遺伝で私だけ丸顔。反対に、私は家族皆と同じく中肉中背だけど、アキだけ誰より背が高く足が長い。

おかげでアキと並んでいて、双子どころか兄妹と見抜かれることさえ、初対面ではまずなかった。平均点の私とは比べるべくもない、顔良し、頭良し、運動神経良しの嘘みたいな完璧超人。それがアキ

だった。

だから、誕生日に私なんかそっちのけでプレゼントが集まることくらい、当たり前なのだ。私にプレゼントが託されるのも、当然といえば当然。「アキの妹」という点が、私の最も価値あるところなのだから。

2・アキと私(2)

帰り仕度を終わらせた後も、そのまま座ってだらだら仁美としゃべっていた。机の上に投げ出した鞆に顎を乗せ、行儀悪く背中を丸めた仁美が、ふと廊下の方へ目を向けた。

「ああ、噂をすれば」

つられて私も顔を上げる。ちょうど女子の一群が、向こうからがやがやとやって来たところだった。

けれど、その中心にいるのは女子ではなかった。頭一つ分背の高い、涼しい横顔が見える。アキだ。

アキを取り巻いている女の子たちは、全校集会の時に壇上でよく見る生徒会のメンバーだった。無愛想にマイクに向かって話す時とは全く違う、弾んだ声でしゃべっている。

「でしょ、行こうよー。お祝いだもん」

「パーティがわりにさ」

賑やかな一団は、我が物顔で廊下を通り過ぎていく。あんなに広がって歩いたら、邪魔になるだろうに。

窓にアキの姿がさえぎられて見えなくなる直前、ふとその顔がこちらを向いた。

ばつちり目が合って、私はちよつとドキツとした。ちようど今、批判的な目で睨んでいたところだったから、変な汗が出た。アキが足を止めたので、周りの女の子も立ち止まる。

アキは何も言わず、ちよつと笑って手を上げた。

こういうところ、アキは律儀だと思う。私ならアキを見かけても、向こうが気づかない限り挨拶なんてしない。アキを囲む女の子たちが、私をちらりと見て不思議そうな顔をした。

そう、そういう視線を向けられるから、嫌なのだ。

私は軽く眉を上げて、ひらひら手を振り返した。早く向こうへ行け、という意味も密かにこめた。

アキは嬉しそうに笑みを深めて、また歩き出した。女の子たちもそれについて行く。「ねー、だからカラオケー」という甘えるような声が、遠ざかっていった。

「女子を引き連れて歩く男なんて、実際にいるんだねえ」

仁美が感心したように言った。私は返事を、口の端をちよつと上げるのみに留める。私にとってはもはや、保育園の時代から見慣れた現象だった。

忘れもしないが、保育園の頃、私は大抵1人で遊んでいた。今よりずっと人見知りが激しくて、アキを取り囲む女の子に近寄れなかったのだ。

つみきや、人形遊び。おままごとで人気なのはアキで、私は呼ばれもしなかった。1人で遊ぶのは、自分の世界に浸れるからそれはそれで楽しかったけど、やはりさみしくもあった。さみしくてつまらなくて、私はよく癪癪を起こしていた。きつと、扱いにくい子どもだったと思う。

けれど、私が泣いて暴れ出しそうになると、いつも計ったようなタイミングでアキがそばに来了。「めーこも一緒に遊ぼう」と、笑って手を差し伸べて、呼びに来るのだ。

今思えばきつと私は当時から、皮肉なものだと感じていたんだろう。人気者のアキがいるから疎外感を感じていたのに、アキのおかげで皆と遊べた。でも、やっぱり私は1人だった。アキが私に構うと、やきもち焼きな女の子からいじわるをされたからだ。他愛ないものだけど、帽子やクレヨンを隠されたことが何度かあった。

「そういえば、めーこはプレゼントあげないの？会長に」

仁美の声ではっと我に返る。プレゼント？

「あげないよ、そんなもの。私ももらわないし」

「そうなの？」

仁美はきょとんとした。私の答えが意外だったようだ。

でも私も、どうしてそんなことを聞かれるのかわからない。

「あんたたち、割と仲良いのに」

「仲は……まあ悪くないけど」

困惑で、きゅっと眉が寄った。

「兄妹の間でプレゼントなんか、しないよ」

アキとプレゼントを渡し合うところを想像して、私は身震いした。すぐく、違和感を感じる光景だ。

「ふうん、そんなものかなあ」

仁美はピンとこなさそうに首をひねった。

仁美は一人っ子だから、そんな感覚がないのだろう。この子は「きょうだい」に憧れているふしさもある。私が何度、兄なんて鬱陶しいことの方が多いと言っても、信じないのだ。

「さあ、そろそろ帰ろうよ」

私は話を打ち切って、立ち上がった。仁美もそうねえと呟いて、大きく伸びをする。

「そういえば、会長の御一行はカラオケとか言ってたねえ」

「そうだね」

私は気のない相づちを打った。ほとんど棒読みだ。

なぜって、仁美が続ける次の言葉が予想できるからだ。

「うちらも行こうよー、カラオケ」

仁美は甘えるように、机に頬をつけて上目づかいをした。

「行きません」

ぱつさりと、私は冷ややかに切って捨てた。馬鹿馬鹿しい提案だ。すぐに、仁美が口をとがらせる。

「ケチー。今日誕生日なんですよ？お祝いだって、会長たちも言うてたじゃんか」

「確かにねー。お祝いしたいよ、私も」

鞆を腕に下げて、目で仁美に立つよう促す。仁美はひるんだように、ぐっと口を引き結んだ。ほら、結局この子だってわかっているんだ。

「今がテスト週間でなければ、ね」

その一言で終わりだった。観念して仁美がうなだれる。

私たち2人は昼間の明るい帰り道を、真面目な学生らしくどこへも寄らず、つまらなく帰った。

3 プレゼント

居間で音楽を聞きながら、ぼんやりとソファ―に座っていた。

勉強にも飽きた。飽きている場合じゃないという理性の声には耳を塞いで、自分の部屋から抜け出してきたのだ。

ちよつと休憩と伸びをしてから、けれどももう1時間はたつてしまっている。時計の針は6時を回っているけれど、家にはまだ誰も帰って来ていなかった。

うちの両親は共働きだ。1番上の兄も働いている。だからこの時間、私はいつも1人ですごしている。

小学生の頃から鍵っ子で通してきた。小さい頃は、学校から帰ったらいつも家でアキと一緒に遊んでいた。けれど高学年にもなるとお互いそれぞれの友達と遊ぶようになって、始終一緒じゃなくなつた。

中学に入ったら、アキはサッカー部にのめり込んで、帰ってくるのは夜おそくになった。そして今では生徒会で忙しくしている。一方の私はずっと、ただなんとなく、やる気のない帰宅部ですごしてきた。部活でも何でも、何かに熱中するような情熱が、私には欠けていた。

そろそろ勉強に戻ろうか、どうしようか。ぼうつと右手の爪を眺めながら考えていた時、玄関の扉を静かに開ける音がした。

「ただいま」

帰って来たのはアキだった。何も言わないのもおかしいので、おかえり、と私は小さな声で返した。

居間に入ってきたアキは、どさりと椅子に鞆を置くと、大きく息をはいた。

「疲れた。なんか、喉が渴いたな」

そう言って、冷蔵庫を開ける。お茶の入ったペットボトルを手にとって、アキはこちらを振り返った。

「めーこも飲む?」

私が頷くと、アキは食器棚からコップを2つ取り出した。

こうやって自然に気をきかせられると、なんだか返って癪に障る気がする。

「……声、枯れてるね」

「え?」

麦茶を注ぎながら、アキが聞き返した。私は口の端を思い切り下げて、憎たらしく言ってしまった。

「喉が枯れるなんて、カラオケはさぞ盛り上がったんでしょーねー。本当、テスト余裕な人はうらやましい」

もちろん、ずっと休憩中だった自分のことは棚上げだ。だって、私とアキじゃ条件が違うのだから。頭の出来という点で。

ああ、とアキは苦笑した。

「俺はそんなに歌わないよ。何かあの空間って、いるだけで無性に喉が渴かない?」

コップを持って、アキがこちらに近づく。ソファの前の椅子にどかりと座って、それに、とアキは続けた。

「テスト週間だけど、ちょっと遊ぶくらい問題ないだろ。テストなんて、今までやってきたことの確認なんだし。慌てるようなことは何もない」

「あつそう」

私は苦々しく吐き捨てた。頭のいい奴はこれだから、と憎たらしくなる。今までやってきたことの確認、だなんて、一夜漬け派の私に対する挑戦としか思えない。

「テスト週間だっていうのに、楽しい誕生日をすごしやがって。不公平だ」

ぶすくれて、ちくちくした気持ちのまま、私は文句を言った。

八つ当たりだつてわかっている。でも、こつちも格差を見せつけられると腹立たしいのだ。双子なんだから、そつちだつて灰色の誕生日をすごせばいい。

アキはふと笑つて、私の不平不満を受け流した。お茶のコップを、なだめるように渡してくる。

「誕生日、おめでとう」

真面目な口調で言われたので、私はちよつとまごついた。

「……そつちこそ、オメデトウ」

こつちの返事は、嫌味な固い口調になった。思った以上に白々しく聞こえて、私は目をそらした。お互いを祝うなんて、なんだか馬鹿みたいだ。鏡に向かつて「おめでとう！」と言つくらい、意味がない。

受け取つたお茶を、やけになつてあおつた。一気に飲み干してしまつて、息をつく。すると目の前に、不意に何かがぶら下げられた。ちやり、と音を立てる銀色のチェーンから視線を横にずらすと、アキが笑つていた。穏やかな表情だったので、私は反射的に払いのけようとした手を止めた。

「何？」

「プレゼント」

催眠術をかけるかのように、アキは鎖を目の前で振つて見せた。

「プレゼントオ？」

驚いて私がそれを掴むと、アキは手を離した。するりと、冷たい細かな鎖が手の甲をすべつて落ちる。その先には、緑色の石がついていた。

四角いその石をつまんで、光に透かしてみた。透き通つた、瑞々しい緑だ。緑柱石、という言葉がぱつと思ひ浮かんだ。

「わあ」

思わず、見とれる。

美しい緑の石の中には、星くずのような光の粒が散らばっていて、光の角度によってきらきらと瞬いた。満天の星空のようにも、晴れた日の海のきらめきのようにも見える。奥行きのあるその世界に、吸いこまれそうだ。

「これ、どうしたの？」

いつまでも眺めていたい欲求を堪えて、私は視線を石から引き剥がしてアキに向けた。アキは私の顔を見て、どこかほっとしたように少し肩を下げた。

「俺が作ったんだ。季節を考慮して、新緑を閉じ込めました。気に入った？」

「とても」

アキが作った、と聞いて納得した。こんなの、なかなか売っていないだろう。売っていたとしても、宝石と同じくとても高校生に買えるようなものじゃないだろう。

そこで、はっと気づいた。

「これ、誕生日プレゼント？」

「そうだよ」

あっさり頷かれて、私は困惑した。

「どうして、いきなり？」

今まで、私たちは誕生日プレゼントのやり取りなどしたことはない。兄妹でプレゼント交換なんて、とても不思議で不自然な感じがする。だからこのペンダントは可愛いけれど、戸惑ってしまう。

アキの意図がわからないからだ。

「別に。なんとなく、あげようと思っただけ。18歳だしね」

眉を寄せる私に、アキは肩をすくめた。18歳だからなんとなく、というのはよくわからない理由だ。余計に混乱してしまう。

「でも、私は、何にも用意してないよ」

アキ宛てに預かったプレゼントを思い出しながら、私はちょっと後ろめたい気持ちになった。自分が、ひどい薄情者になった気がした。

「いいよ。俺が勝手にあげようと思ったただけだから」

「でも」

私はペンダントを握りしめた。こんなきれいなものを、もらっただけもらって何も返さないなんて、それこそ不公平で不自然だ。私だけじゃない、お互いの誕生日なのに。

「本当に、何もいらないよ」

アキは首を振って、立ち上がった。そのまま、コップを流し台へ持っていく。なんだか拒絶されたように思えて、私は何も言えずにその背中を見つめた。

「金なんてかかってないし、何かもらう方が心苦しい」

そう言くと、アキは振り向いて鞆を取り上げた。この話を、もう終わりにするつもりらしい。釈然としないまま、私はただ、アキを見送るしかなかった。

けれどアキは、居間を出て行きかけた足を、ふと止めた。そうして考え込むそぶりをしながら、ぽつりと言った。

「物はいらない。でも、そうだな。代わりと言ってはなんだけど」
ちらりと振り向いて、アキは笑った。

「　　思い出してほしい、かな」

私がぼかんとしている間に、アキは居間を出て行った。どのくらい呆けていたかわからないけど、私はしばらく動けなかった。驚いたのだ。あまり、見ない笑い方だったから。

いつもの明るい、皆を惹きつける笑顔じゃなかった。あんな、苦みを堪えるような顔を、アキもするのだということに驚いた。そん

なの、全然似合わない。とても意外だ。

私は隣に転がっていたクッションを抱きしめて、ずぶずぶソファに沈みこんだ。そのままずり下がって、ついにはこてんと横に寝転がった。その間もずっと、アキの出て行った扉を見つめていた。手の中のペンダントのチェーンが、さらさらと音を立てる。今日のアキには戸惑わされてばかりだ。

思い出してほしいって、何をだろう。

4・モト兄

お風呂からあがって、牛乳を飲み起居間へ向かった。お風呂あがりの1杯の牛乳が、私はやめられない。牛乳はいつでもおいしいけど、あれは特別おいしいと思う。仁美には「太るんじゃないの?」と言われるけど、そんなのガセ情報だって信じてる。

居間に入ると、モト兄がいた。テーブルについて、ご飯を食べている。

「あ、おかえりー」

声をかけると、新聞を読んでいたモト兄の目がこちらを向いた。ながら食いはやめろといつもお母さんに言われているのに、この兄は聞く耳なんてもっていない。

「今日は早いんだね」

「おう」

咀嚼しながら、モト兄は短くこたえた。

早いといっても、既に10時を回っている。でもモト兄は日付が変わってから帰宅したり、ひどい時には会社に泊ったりするから、今日は本当に珍しい。

野田家長男の基夫兄さんは、私たちより5歳上だ。もう社会に出て働いていて、ちょっといい加減なところはあるけど、頼れるお兄ちゃんだった。

同じ兄でも、アキには感じない安心感が、モト兄にはある。きっと、「お兄ちゃん」という足場がしっかりしているからだろ。こっちも、迷うことなく妹の立場で甘えていられる。変に比べられることもないから、モト兄という時の方が私は気楽だった。

「可愛い妹と弟の誕生日だから、早く帰って来たの?」

モト兄の隣の椅子に座って、私は頼杖をついた。煮物をつまむ箸をとめて、モト兄がきよとした。

「何、誕生日？そっぴゃお前ら、今日だっけ」

信じられない、と私は思い切りブーイングをしてやった。モト兄はお茶碗を持ったまま、僅かに身を引く。

「飯食ってるんだから、騒ぐな」

「じゃあ、何かちょうだいよ、社会人のお兄さん」

はあ？とモト兄は眉を上げた。丸く見開かれた目がちょっと間抜けに見えて、私は笑った。

「だから、可愛い妹にさ、お誕生日プレゼント。何かないの？」

「いや、自分で可愛いとか、寒いから」

にやっと笑って、モト兄は軽口を返してきた。私は顔を顰めてみせる。モト兄のこういうノリが、とても好きだ。

「プレゼントとか、欲しいモンでもあるのか？」

待ってましたと、私は指折り数え上げた。

「欲しいものなんて、いっぱいあるよー。お財布でしょ、鞆でしょ、あと新しいマニキュアと」

「アホか。落ちが読めたぞお前」

呆れた顔で、モト兄はさえぎった。

「どうせ、ブランドのやつとか言うんだろ。買えるか」

やっぱり駄目かと、私は舌を出して肩をすくめる。

もちろん、ブランド物なんて冗談だ。本気でねだったわけじゃない。モト兄もわかって乗ってくれたんだろ。しょうがないな、とため息をつきながらも笑ってくれた。

「やつすいやつなら、買ってやらんこともない。１００円ショップとかで」

「何それ！」

ひどいぬか喜びだ。モト兄はにやにや笑いながら頷いた。

「それなら何でも買ってやるぞ。化粧品でも、アクセサリーでも」

そう言われて、私はふと黙った。アクセサリー、で思い出したのだ。

アキからもらったペンダント。今は、部屋の机の上に置いてある。あの後、ずっとぼんやり眺めていたけど、結局何もわからなかった。本当に、あいつは何を考えているのかわからない。思い出してほしい、だなんて、私は何かを忘れているのだろうか。

「……アキがさ、喜びそうなプレゼントって、何だと思う？」

ぽつんと聞くと、モト兄は面食らったように瞬いた。

「え、明彦？なんでまた？」

「アキに、誕生日のプレゼントもらったんだ」

へえ、とモト兄は感心したように顎を撫でた。ペンダントの鮮やかな緑を思い浮かべながら、私は言った。

「だから、私も何かあげなきゃまずいかな、と思って……」

「お前ら、プレゼント交換なんてするんだな」

どこかからかうような含みで言われて、私はちょっとムツとした。アキとプレゼントをあげ合うなんて、やっぱり私には気恥ずかしいからだ。からかわれると、私が考えたことじゃないと反論したくなる。

「今までやったことないよ。意味わかんない。アキは、『18歳だから』とか言ってたけど」

「へえ、あいつもやるなあ」

モト兄はのんきにお茶を飲んでいる。

私はテーブルの下で、モト兄の足を蹴ってやりたくなった。私がこんなに戸惑って、途方に暮れているのに、こんなどうでもいいという態度をとられると腹が立つ。確かに、人にとってはどうでもいいことなんだろうけど。

思い出して、と言われた。私は何を思い出すべきなんだろう。

わからなくて、ひたひたと染みだす焦りに、追い詰められていくような気がする。

黙り込んだ私の不機嫌を察したのか、モト兄がなだめるように言っ

った。
「まあ、何でもいいんじゃないか。明彦は明子がくれるものなら、何だつて喜びそうだし」

「それは、ないと思うけど」

既に、物じゃないものを求められている。私はため息をついた。
何一つ思い出せない以上、私のあげるものでアキが喜ぶことはないだろう。

「そうか、お前らももう、18歳なんだな」

しみじみと、モト兄が言った。その言葉に込められた感慨を、私は不思議に思った。

18歳って、何かのきつかけになるような、そんなキリの良い年なんだろうか。アキが私にプレゼントを贈る、理由になるような。

大人でもない、中途半端な年。私には、そうとしか思えないのだけ

5・石の女

アキからもらったペンダントを、私はこっそり学校につけていった。

お返しに困る贈り物でも、貰ったものに罪はない。私は何だかんだ言っ、この美しい緑石のペンダントを気に入っていた。気に入っているから、いけないとわかっていても、ちよっとつけてみたいという欲求に勝てなかったのだ。

それに、アキへのお返しのことを、仁美に相談したいという思いもあった。

「アキが私に思い出してほしいこと」がさっぱりわからない以上、せめて他の何かで補わなくてはならない。アキから一方的に貰いはなしなのは、借りをつくったみたいで気持ち悪かった。

でも、私1人で考えていても、「アキの喜びそうなもの」なんて見当もつかないのだ。

「そんなこと言っ、妹のあんた以上に、私なんかが思いつくはずないじゃんか」

仁美が呆れたように言っ。あまりに正論で、私はぐうの音も出ない。

憂鬱なテストは今日が最終日だ。全て終わった今、解放感に満ちあふれた皆で廊下は騒がしかった。今日から部活が再開されるから、教室も中庭もお昼を食べる人でにぎわっている。私も仁美も、ちよとど購買へ行くとこるだ。

仁美の入っている軟式テニス部が始まるまで、一緒にお昼を食べつつ心ゆくまでだらする気でいた。……あらゆる意味でテストが終わったので、お互いねぎらってなぐさめ合おうというわけだ。

「めーこ、会長の好きなものくらい知っているでしょ？趣味とか」
「まあ、知ってはいるけどさあ……」

もごもごと、私は口の中で言葉を濁した。

知っていても、何の参考にもならない。アキはジヨギングが趣味で、スポーツではたぶんサッカーが一番好き。最近よく聞いている音楽は洋楽なので、私は詳しく知らない。食べ物に好き嫌いはない。私が知っているのは、この程度だ。

「いいもの貰ったから、下手なものあげられないし……」

「そうねえ。　ね、もう一回見せてよ、ペンダント」

仁美が目を輝かせて、私の顔を覗き込んできた。私はごそごそと、制服の下からチェーンを引っ張り出した。

緑の石が揺れて、光の加減で濃淡の複雑な色に変わる。仁美が感嘆のため息をついた。

「本当すごいなあ、それ。めーこ、愛されてるね」

「何、愛されてるって」

そのかゆい響きに反射的に顔が歪んだけど、仁美は肩をすくめただけだった。

「愛がなきゃ買わないでしょう。それ、絶対高いって」

「……そうだね」

私は曖昧に頷いた。思わず、目が泳いでしまう。

アキはこのペンダントを買ったのではなく、作ったのだと言った。私はそれに納得したけど、きっと仁美に言っても信じてもらえないだろう。私だってアキでなかったら、こんな石を作ったと言われても真に受けない。

私にとっては当たり前なことだから、深く考えたことはないけれど、アキにはそういう「不思議」があった。私はそれを、手品のようなものだと思っている。タネも仕掛けも、アキにしかわからない手品だ。

アキが「新緑を閉じ込めて作った」と言っただから、そうなのだろう。

う。私の頭には、アキが瑞々しい若葉を摘んで、両手で包んで、開いた時には石に変わっている、そんな光景が思い浮かぶ。実際はどうやるのか知らないけど、だいたいそんなふうにして作ったのだと思う。

まるで手品のように、無から有を生み出すアキの「不思議」。普段意識はしないけれど、これが常識として通じるのは、おそらく野田家の中だけだ。それはわかっていた。

「それと同等の価値のものって あ」

仁美が唐突に言葉を切った。何、と聞くより前に、左肩にどんと何かが当たった。

「痛っ」

「あ、ご、ごめんなさい」

足を止めて、私は慌てて謝った。ぼーっとしていたせいで、誰かにぶつかってしまったのだ。

ぶつかってしまったのは女子だった。ふんわりしたボブの、眼鏡をかけた女の子だ。ふと、どこかで見かけたことがあるように感じた時、その子はキツと顔を上げた。肩を押さえて、こちらを睨む。

強く非難するような視線に、たじろいでしまった。そんなに、強くぶつかってしまったのだろうか。

「それ、禁止ですよ」

女の子は、冷たい声でそう言った。

「え？」

何を言われたかわからなかった。女の子は眼鏡を軽く押し上げて、厳しい目を私の首元に向けた。

「校則違反です。それ、外してください」

「あ、すみません……」

勢いに圧されて、私は首を縮めて頭を下げた。ちょうどペンダントを出していたのが、気に障ったのだろうか。

なんとなく、手で石を握って隠す。校則を破ったのはこちらだけ

ど、じろじろと無遠慮な視線をぶつけられるのは嫌だった。第一、校則違反だとわざわざ注意してくるなんて、この子は一体誰なんだろう。

「あなた、野田会長の妹？」

唐突に、喧嘩を売るような口調で聞かれた。私は、自分の眉がぐっと寄るのがわかった。

「……そうですけど？」

自然、こっちの口調も刺々しくなる。

仁美が小さく、袖を引っ張ってきた。私がムツとしているのを感じて、なだめようとしてくれているのだろう。「アキの妹」と見られて評価されることが、私の逆鱗なのだと仁美はわかっている。

「ふうん」

失礼な女の子は、上から下まで私を眺めて、興味なさそうに呟いた。

何も言わなかったけど、その目と態度が全てを語っている。

「あなたみたいなのが、あのアキ会長の妹なの？」と言いたいんだろう。

「すいませーん。これ、ちゃんと外すんで。それじゃ」

緊張した空気を壊すように明るく言って、仁美がぐいと私の肩を押してきた。それを聞くと女の子は、もう用はないとばかりに顔を背けて、すたすた去っていった。毅然と歩いていくその姿を見送って、私は舌打ちをして、仁美はため息をついた。

「さすが、キツイなー。噂通りだよ」

「誰、あれ」

苛々して、私は吐き捨てるように言った。明らかに、彼女は私に對して喧嘩を売っていた。お昼時の楽しい気分が台無しだ。

「生徒会の役員の子だよ。副会長の、石橋希美。知らない？ 融通の利かない『石の女』って」

「……ふうん」

生徒会役員なら、行事なんかで生徒の前に立つことも多い。どう
りで見覚えがあるはずだ。

そして、私を目の敵にするような態度にも、納得がいった。

生徒会や委員会には、アキの信奉者が多いつて本当のようだ。

「まあまあ、コロツケパンでも食べて、気分変えようよ」

仁美がとりなすように言う。私もため息をついて、歩き始めた。

「……コロツケもいいけど、私は今日は、チーズのやつにしようか
な」

仁美としゃべりながら、そつと首元のペンダントに触れた。

とても気に入っているのに、今はその石を、引きちぎって投げ捨
ててしまいたくなった。

6・仲間はずれ

モト兄が私の部屋のドアをノックしたのは、休みの日の夜のことだった。

「おい、ちよつとこつち来い」

ドアから少し顔を覗かせて、モト兄が言った。変に上機嫌な声なので、酔っぱらっているのかもしれない。

別に見られて困るものはないけど、部屋の中をじろじろ見られたなくて、私は慌てた。のんびり読んでいた漫画本を、急いで閉じる。

「何？」

「良いもんやるから」

モト兄はにやりと笑って、扉を閉めた。

どうやら、行かなきゃいけないらしい。私はため息をついて、立ち上がった。モト兄の言う「良いもの」なんて、かなり怪しいのだけど。

居間に行くと、モト兄が白い紙袋の中から、小さな箱を取り出しているところだった。何だろうと横から覗きこむと、モト兄はほれ、とそれを渡してきた。

「何？これ」

それは細長い、小さな包みだった。落ち着いた色合いの包装紙で、きれいに包まれている。感触は固くて、何が入っているのかはわからなかった。

「誕生日プレゼントだ。前言ってただろ」

モト兄はどこか得意げに言った。

驚いて、私は包みから顔を上げた。まさか、本当にくれるとは思っていなかった。

「嘘、くれるの？開けていい？」

「どうぞ。先に言っておくけど、大したものじゃないからな」

モト兄はひらひら手を振った。私は破れないよう慎重に、爪の先でそっと包みをはがした。

箱に入っていたのは、携帯ストラップだった。

でも私がつけているような、安いぬいぐるみ型のやつじゃない。なめらかな革でできた、大人っぽいデザインのストラップだ。どこのお店のものかかわらないけれど、100円ショップで買ったのではないことは、すぐわかる。

「おー、すごい」

ストラップをつまみ上げて、私は素直に感動した。単純に、モト兄がプレゼントをくれたことが嬉しかった。ストラップ自体は正直なところ、私が好んでつけたくなるような種類のものではないけれど、それは問題じゃない。こういうのは、気持ちが嬉しいのだ。

「ありがとう。つけるよ、コレ」

「おう」

モト兄はちよつと照れくさそうに頷いた。

それにしても、「18歳」の力はこのなにごいのか。嬉しさを乗り越して、戸惑ってしまうほどだった。アキからもモト兄からもプレゼントをもらってしまうなんて。一体2人とも、どうしたのだらう。

「良いものって何？モト兄」

考え込んでいた時、背後からアキの声がした。振り返ると、興味ありげな顔でアキが私の手元を覗きこんでいた。

「おう、誕生日のプレゼントだ。お前にもあるからな」

モト兄が笑って、紙袋からもう1つ小さな箱を取り出した。私の包みとは包装紙が違うから、別のところで買ってきたのだらう。アキにもちゃんと用意するところが、モト兄のいいところだと思う。アキはお礼を言って包みを受け取ると、さっそくそれを開けた。

「おお、すごい。これ、高いんじゃないの？」

そう言ってアキが箱から取り出したのは、音楽プレイヤーの卓上スピーカーだった。小さなマグカップのような形をしていて、プレイヤーを中に差し込んで使うやつだ。黒くてシンプルなデザインで、オブジェとしても使えそうだった。

「いや、実は在庫一掃セールとかで、安かったんだよ」

モト兄が苦笑した。アキは顔を輝かせて、すげーという言葉を出した。

「こういうの、ちょうど欲しかったんだ。ありがとう、モト兄」

笑うアキは、本当に嬉しそうだ。そのことに、私はちよつと衝撃を受けた。

「アキの欲しいものの」の正解を、モト兄があつさりと当てたことが衝撃だったのだ。いくら考えても、私には全然わからなかったのに。モト兄がそれを知っているとは、思っていなかった。

「ところでお前、例の新曲聴いた？」

「あれね。モト兄の最近オススメのバンドだっけ」

アキは私の知らない英語のバンド名を挙げて、すらすらと感想を述べた。ドラムがどうの、ベースがどうのと、わからない世界の単語が並ぶ。モト兄がそれに頷いたり、「いやお前、あれは最高だろ」と反論したりした。

完全に蚊帳の外に置かれた私は、2人の間でただ間抜けに立ちつくした。

ここに3兄妹がそろっているのに、私だけ話に入れない。居心地が悪くて、私はうつむいて手の中のストラップをいじった。

こういう時、女1人の疎外感を感じる。

私とアキは双子だけど、きょうだいの結びつきは、たぶんモト兄とアキの方が強いと思う。なにせ男兄弟だ。

モト兄にはアキの欲しいものなんて簡単にわかるし、アキだって

モト兄との方が話が合う。現に今、2人とも楽しそうだ。
そして私は、ぽつんと仲間はずれ。
つまらない。

仲間はずれ。

ふとその言葉が引つかかって、私は顔を上げた。
既視感を感じたのだ。ずっと前にも、同じようなことを考えたことがある気がする。

いつだったか小さい頃、今みたいに兄妹の中で疎外感を感じて、癪癪を起こした覚えがある。モト兄とアキが2人で楽しそうに遊んでいて、うらやましくて泣いて暴れたのだ。その時に思った。

本当は、アキの方が仲間はずれなのに。

でも、そう思ったことしか思い出せなかった。アキが仲間はずれて、どういうことなのだろう。ずいぶん前のことだから記憶が曖昧で、なぜそう思ったのかわからない。その時仲間はずれだったのは、間違いなく私の方なのに。

口元に手を当てて、私は真剣に考え込んだ。些細なことだけど、どうしてか無性に気になった。

「明子、どうした？」

モト兄の声で、はつと我に返った。気がつくともト兄とアキの音楽談義は終わっていて、2人とも怪訝そうな顔をしてこちらを見ていた。

私は慌てて手を振った。

「な、なんでもない。ちょっと考え事」

モト兄が首を傾げる。

「なんだ？言っておくが、お前のも明彦のも、大きさは違っても値段に差はないぞ」

「そんなこと気にしてたんじゃないよ！」

まるで私が、がめついみたいじゃないか。焦って首を振って否定する。

そうか？とモト兄がにやにや笑った。その様子を面白そうに見ていたアキが、モト兄の方を向いた。

「本当ありがとう、モト兄。これ、大切に使うよ」

そう言って、アキは自分の部屋に戻っていった。その背中に声をかけようとして、私は結局、そうしなかった。

仲間はずれて、何のことだっけ？

そうアキに聞いても仕方がない。あれは私の記憶なのだから。

7・居眠りとペナルティ（1）

私とアキは2人そろって、ベランダで空を見上げていた。

数年に1度の流星群があるという夜だった。ずっと前のニュースでそれを知って、私はこの夜を楽しみにしていた。カレンダーに丸をつけて、一緒に見ようとアキと2人で指折り数えて待っていたのだ。

けれど残念ながら空は重く曇っていて、星は1つも見えなかった。がっかりして、私は唇を尖らせた。

「つまらない。流れ星、見れないじゃん」

「……うん。残念だね」

ベランダの手すりにつかまって、アキもため息をついた。

夏の終わりの頃だったから、もうコオロギや鈴虫の音が周りにあふれていた。涼しく乾いた風がプランターの花を揺らして、私たちの間を吹き抜けていった。ひどくさみしい気持ちになる夜だった。

「……楽しみにしてたのに」

ふてくされて、私はまた言った。大事な約束を破られたような気分だった。

なんだか涙が滲みそうになって、意味もなく地面を蹴飛ばした。

不機嫌な私の行動を見ていたアキが、首を傾げた。

「じゃあ、流れ星見に行く？」

さらりと聞かれて、私はびっくりした。

「え、でも、曇ってるよ」

「がんばればたぶん、見えるよ。雲がなくなればいいんでしょう？」

そう言って、アキはちらりと窓の方に目をやった。その仕草で、お母さんたちには秘密のことなのだとピンときた。窓が閉まっているから家の中には聞こえないのだろうけど、私は声をひそめた。

「どうするの？」

「屋根の上に行こう。ベランダじゃやりにくい」

アキもささやき声で返した。

屋根の上、と聞いて私は尻ごみした。そんなところに上ったことがばれたら、お母さんからどれだけ怒られるか、考えるだけで恐ろしかった。

アキがまた、ちらりと家の中を窺った。

「今なら大丈夫だよ。すぐ戻ってこれば、きつとばれない」

アキは身軽な動作で、手すりにひょいと飛び乗った。

私はひやりとして、とっさに手で口元を覆った。細い足場は頼りなくて、アキの小さな足でもすべり落ちてしまいそうだ。危ないと叫びたいけど、大きな声を出したら、家の中の皆に気づかれてしまう。

アキはけろりと笑って、私に手を差し出した。

「怖がらなくても平気だよ。めーこは僕がちゃんと連れて行くから」

「怖がったんじゃないよ。あたしはアキが落ちちゃうんじゃないかって、心配したの!」

私はムツとして、アキの手を勢いよく掴んだ。勝手に、意気地なしだと思わないでほしい。

アキはちよつと目を見開いたあと、ぱつと嬉しそうに笑った。

何がそんなに嬉しいのか、私にはよくわからなかった。

「平気だよ。前に言っただろ? 僕は」

「と。おい、いい加減にしろ、野田妹!」

すぐ横で怒鳴られて、私はびくんと飛び起きた。

「は、はい!」

反射的に返事をして、横を向く。角刈りの強面な男の人が、眉を上げて睨むように私を見下ろしていた。

一瞬、頭がついていかず私は固まった。このコワイ人は何?

でも、教室中に広がっていく忍び笑いで、やっと今が英語の授業中なのだと思い出した。かあっと、恥ずかしさで頬が熱くなる。

完全に、居眠りをしてしまっていたようだ。

「まったく、3年にもなつてそんな授業態度じゃ、どうしようもないぞ」

指先で苛立たしげに私の机を叩き、英語の高科先生は教卓へ戻っていった。私は縮こまりつつ、ドキドキ鼓動の速まった胸をそっと押さえた。高科先生は、本当は英語じゃなくて体育の先生なんじゃないかと言いたくなるくらい、厳つい風貌をしている。起きがけにこの先生に怒鳴られるのは、心臓に悪かった。

「お前近頃、どうも身が入っていないようだな。テストも良くなかったし」

先生は不機嫌そうに呟いた。クラス全員の前でテストのことを話題にされて、私は慌てた。

「……スミマセン」

少し頭を下げて、もごもごと小声で謝る。高科先生のこういう、ずけずけとキツイ物言いが、私はとても苦手だ。

ふと目を向けると、斜め前の席の仁美が、振り返ってこちらを見ていた。呆れと同情を半分ずつ混ぜたような笑みをよこしてくる。

私はこっそり、肩をすくめてみせた。

「まあとにかく、お約束のペナルティだ。放課後、生徒会顧問室に来るように」

厳しく言い渡されて、げ、と頬が引き攣った。

そうだった。高科先生は、授業中の私語と居眠りと携帯に関して、かなり厳しく対応する。見つかったら、問答無用でペナルティだ。よりによってこの授業で居眠りしてしまった自分のうかつさに、私は舌打ちしたくなった。

眠っている間、何かふわふわと夢を見ていた気がするけど、そんなこと今は問題じゃない。

「わかったか？野田妹」

「……ハイ」

下を向いて、私は小さく返事をした。本当は、「野田妹」なんて腹が立つ呼びかけには答えたくなかったけど、下手に反抗してペナルティが増えても困る。私は苛立ちを、ぐっと飲み込んで堪えた。

8・居眠りとペナルティ(2)

高科先生は生徒会顧問の先生だから、職員室ではなく顧問室に机がある。生徒会顧問には高科先生を始め厳格な先生が多いから、私は苦手だった。何をさせられるのかと及び腰で向かったけど、言いつけられたのはただの掃除だった。

顧問室横の小さな備品室を開けて、高科先生はあっさりした態度で言った。

「棚の整理と、ほうきがけね。俺はこれから会議だから、終わったら鍵だけ返しておいて」

忙しくて生徒の罰掃除なんかに構ってられないのか、意外なその監督の甘さに私は拍子抜けした。けれど私の気の抜けた顔を見て、先生はしっかり釘をさしていった。

「ちゃんとやれよ。いい加減にやったらわかるんだからな」

念を押すように睨む目を、私は首を縮めてやりすごした。ふてくされて無視をしていると思われるかもしれないが、これが1番穏便な対応なのだ。気を抜くと、睨み返して文句をこれでもかと並べ立てて反発したくなる。どうしても、高科先生とは肌が合わないらしい。

備品室は普通教室の半分くらいの大きさで、大きな棚と机以外には何も無い、薄暗い部屋だった。それほど散らかっているというところはない。ただしあまり掃除はされていないようで、床には大きなわたぼこりが転がっていた。

それを爪先で蹴飛ばして、私はやれやれとため息をついた。なるべく早く終わらせて、帰ろう。

まずは床のほこりを、ほうきでさっと掃き集めた。それから目についた棚を整理していく。もしお母さんがいたら「順序が悪い、掃

除は上から！」と注意するのだろうけど、そんなきちんとした手順は面倒だ。やってやる義理もない。

ほつきがけよりも、棚の整理の方が手ごわそうだった。はさみやカッターなどの文房具があちこちに散らばっていて、プリントは無造作に積み上げられているだけだ。それを適当に整えて、元の場所にまた突っ込んでいく。うんざりしながら何度かその作業を繰り返していた時、整えたプリントの山からA4の紙が1枚、ひらりと落ちた。

「もう。せつかくきれいにしたのに」

私はかがんで、その紙を拾い上げた。何気なく見てみるとそれは、先月の生徒会新聞だった。

4月号の紙面には、就任したばかりの生徒会役員の紹介と抱負が書かれていた。トップで1番大きなスペースを使っているのは、もちろんアキだ。感じよく微笑んで、まっすぐ前を見つめている写真が、記事の横に掲載されている。アキの写真うつりの良さは、本当にうらやましい。

記事の中では、公約の実現について抱負が述べられていた。役員選挙の時アキが公約に掲げていたのは、一部校則の見直しと、学校祭の充実の2つだ。

特に「校則の見直し」の方は、アキたち生徒会が長く取り組んでいる悲願だった。アキは1年の頃から生徒会に入っているけれど、その時から既に先輩たちが中心になって活動を始めていたらしい。長い時間をかけて、面倒で正当な手順を踏まなければ、重い岩のような学校の規則を動かすことはできない。先輩から何期も引き継がれてきたこの案件に、アキは自分の代で決着をつけたいと考えているらしかった。以前、ふとした会話の中で、こんなことを言っていた。

「たぶん先生たちも、どうしてそんな規則があるのか、理解できないものが多いと思うよ。そんなのおかしいって、俺たちは言い続け

てきた。議論もつくした。もう、機は熟したはずだ」

雑談のことだったから口調は軽かったけど、真剣な横顔からは、強い決意がうかがえた。その時、私はその熱意にただ圧倒されて、ふーんと意味のない返事をするしかできなかった。

新聞をプリントの上に戻して、私はちよつと口元をつり上げた。

本当に、私とアキは全然違う。

双子なのに、全く似ていない。似ていないことを、引け目に感じてしまうくらいだ。アキは完璧だ。完璧で、それだけじゃなく努力もしていて、真剣に打ち込んでいることがある。間抜けにぼーっとしているだけの私じゃ、何をどうしたって太刀打ちできないはずだ。

「……双子なのにな」

何度思ったかわからないことを、私はぼつりと呟いた。

その時、いきなりガラツと扉が開いて、私は飛び上がるほど驚いた。

高科先生が来たのかと思った。サボっていたわけではないけど、少しぼーっとしていたところだったから、私は慌てた。

けれど振り返ってみると、そこにいたのは、先生ではなかった。

「……あなた、何してるの？」

咎めるような目つきでじろりと睨まれ、私はとっさに答えられなかった。

性格のキツそうな目つき、柔らかそうなボブの髪。ノーフレームの眼鏡を押し上げる仕草も、見たことのあるものだ。

石橋さんだった。

驚いて動揺してしまったけれど、私はすぐに立ち直った。

先生じゃないなら、焦ることはない。何をしているのかと聞かれたけれど、それはこちらのセリフでもある。この人は何をしに来たんだろうと、私は不思議に思って石橋さんを見つめ返した。

石橋さんは、ちらりと私の首元に目を向けた。以前、ペンダントを注意されたことを思い出して、私は居心地が悪くなった。あれ以来、ペンダントをつけて学校に来たことはない。だから堂々としていればいいのだろうけど、厳しくチェックしてくるような視線が、不快だった。

「……何って、掃除だけど」

視線を避けるよう身をよじりながら答えると、石橋さんは不審げに眉をひそめた。

「ここは生徒会管轄の備品室です。勝手な立ち入りはできないはずだけど」

勝手な、というところに力がこもっていた。一方的に決めつけるような言い方に、私はムツとした。

「別に、忍び込んだわけじゃない。先生に言われて掃除してるだけだよ」

「先生？何先生ですか？」

どうして不審者扱いされて、詰問されなきゃいけないんだろう。だんだん積み上がる苛立ちをかるうじて押さえつけながら、私は顎を突き出して憎たらしく言っちゃった。

「英語の高科先生です。授業中の居眠りのペナルティに、ここの掃除をしろって言われました」

石橋さんの眉がぴくりと動いた。

「信じられない、居眠りなんて」

石橋さんはそう呟いてから、はっとしたように口元を押さえた。気まずそうに目をそらす。

でも今更口を押さえても、言葉は既に私の耳に届いてしまった。ついっつかり、みたいなアピールをしたって駄目だ。私はもう、完

全に頭にきた。

この人は一体、何だというのだろうか？私は思い切り、石橋さんを睨みつけた。

「用がないなら、出て行ってくれない？掃除の邪魔なんだけど」

「用ならあるわ。資料を取りに来たんです」

石橋さんもムツとしたように、強く言い返してきた。

どうやら私たちは、お互いがお互いに苛々してしまう存在らしい。天敵同士なのかもしれない。私は既にこの人と向かい合っていることが我慢ならないし、向こうだってそうだろう。

そういう人とは、早く離れた方がお互いのためだ。私は提案のつもりで言った。

「なら、さっさとそれを取って、帰れば」

「何、それ」

途端に、石橋さんの頬がさつと赤くなった。

「ここは生徒会の部屋よ。どうして、私があなたに言われて出て行かないやいけないの。生徒会とは何の関係もないあなたに」

石橋さんは強い口調でまくしたてた。がらりと変わったその様子に、私はちよつと慌てた。何か、この人の地雷を踏んでしまったのだろうか。

「そういうことじゃなくて、気に入らないのなら」

「私だって、気に入らないわ」

石橋さんはぴしやりとさえぎった。どうも、話が通じない。だからそうじゃなくて、と続けようとした私に、石橋さんは吐き捨てるように言った。

「会長のきょうだいだからって、何様のつもり。あなたなんて、野田君の妹にふさわしくないような人じゃない」

言われた瞬間、頭が真っ白に沸騰した。

同時に胸がすうつと冷たくなって、眩暈がしそうだった。

「……そうかもね」

怒りのあまり声が震えるなんて、初めてのことだ。

これほど怒っているのに、ひどく冷静に石橋さんの言葉を受け取っている自分もいた。感情がぐちゃぐちゃに散らばって、混乱してしまう。睨みつけてくる石橋さんに、私は口の端だけで自嘲的に微笑んだ。たぶん、失敗したと思うけど。

「私も、そう思う」

今までずっと、そしてついさっきも、考えていたことだ。

でももう、限界だった。

「……じゃ、私が帰る。石橋さん、ここの鍵、よろしく」

いきなり低く勢いのなくなった私の声に、石橋さんは戸惑ったように瞬いた。私はうつむいて彼女の顔を見ないようにしながら、足早にその横を通り抜けた。

罰掃除なんて、もう知らない。一刻も早く、ここから離れたかった。

廊下を通り、靴箱のある昇降口へ向かう。すたすた歩く足はしだいに、駆け足になった。顔に受ける風が、ひどく目にしみた。

9・双子（1）

いつかの、遠い声がする。

めーこちゃん、アキくんと双子なんだよね？

それは、期待が外れてがっかりした顔で言われる言葉。

馬鹿にするように笑って指をさされて、言われたこともある。あるいは、目配せと共にひそひそとささやき合われたこともある。

私はそれが大嫌いだった。勝手に期待して、勝手に失望しないでほしい。アキと比べるのではなく、「私」をちゃんと見てほしい。

何度もそう叫んだのに、届くことはなかった。

家族と仲の良い友達は、私のことをわかつてくれる。本当は、それだけで満足すべきなのかもしれない。でもやっぱりもつとわかってほしくて、周りの人に「私」を訴えかけるけれど、いつも「アキ」の幻影に打ち碎かれるのだ。

めーこちゃんは、全然違うよね。

過去に突き刺さった声が、もつずっと前のことなのに、何度も頭の中に響いている。

もう嫌だ。大嫌いだ。

部屋に閉じこもって、私は頭から布団をかぶっていた。

最悪の気分で学校から帰って来て以来、ずっとこうしている。とうに夕食の時間は過ぎていた。お腹はすいているけれど、私はベッドの上に座りこんだまま、動けなかった。お母さんには、ちょっと具合が悪いのだと言って誤魔化した。

でも、全くの嘘じゃない。少し頭が痛いし、胸の奥が重く沈んでいるようで、息苦しかった。……風邪をひいたわけではないけれど、石橋さんの言葉が、昔の嫌な記憶までどっと呼び起こして、頭がパンクしてしまいそうだった。嚴重に鎖を巻いて鍵をかけていた箱が、いきなり破裂してしまったかのようだ。押し寄せた負の感情に混乱して、一歩も動けない。ただ布団の中で丸くなって、じっとしているしかなかった。

どうして私は、アキと比べられて、軽蔑されなきゃいけないんだろう。石橋さんの冷ややかな目が、保育園の時の意地悪な女の子たちと重なった。

もしかしたら、石橋さんはアキのことが好きなのかもしれない。だから私のことが余計に気に入らないのだろう。できそこないのくせに、アキの双子の妹だから。

なんだやきもちか、と笑い飛ばしてやろうとしたけど、駄目だった。私は膝を抱えて、腕に額を押しつけた。遠くへ行ってしまうたかった。

控えめな、ノックの音がした。意識がそれに引っぱり上げられて、私は顔を上げた。照明が眩しくて、目がチカチカする。

もしかして今、少し寝ていたのだろうか。何時なんだろう、と思いつきながら、私はドアの方を向いた。

「……誰？」

「俺だけだ。めーこ、体調悪いんだって？」

そう言っただけを覗かせたのは、アキだった。

「大丈夫？母さんが、何か食べれるかって？」

心配そうな表情をしたアキは、布団をかぶった私の姿を見た途端、ぷつと吹き出して笑った。

「何してんの。まんじゅうみたいだ」

軽い楽しい笑い声が、今の私には癪に障った。少し遠ざかっていた嫌な気分が、ひたひたとまた戻ってくる。

「……何、それ。人のことそんな風に言わないでよ」

「だって、丸くなって面白かったから」

アキはくすくす笑ってから、私の顔を窺うように少し首を傾けた。「それで、体調は？何か食べれそう？」

アキはきつと、善意で私の部屋の様子を見に来てくれたんだろう。でも、駄目だ。今のぐちゃぐちゃな私には、素直に感謝することはできなかった。

私の間拔けな姿を笑いに來たのかって、苛立ちが胸に湧き上がった。

10・双子(2)

「……本当、信じられない。生徒会の人って、失礼な人ばかりだ」
どうしようもない気分のままに、私は吐き捨てた。

「え？」

アキはきょとんとして、目を丸くした。当然だ、アキは知らないことなのだから。いきなり中傷されても、何のことかわからないだろう。

でも、止まらなかった。

「あの『石の女』とかいう人だけかと思ったけど、皆そうなんだね。顧問の先生だってム力つく奴なんだもん。最低の集団だ」
アキの表情が消えた。

言い過ぎだってわかっていたけど、謝る気なんか毛頭なかった。私は挑戦的にアキを睨みつけた。アキも、腹を立ててしまえばいいのだ。

アキはするりと部屋の中に入ってきて、ドアを閉めた。とても静かな動作だった。

「……めーこ、何かあったのか？」

落ち着いた声からは、アキの怒りは読みとれなかった。内心なんてわからないけれど、見る限り平静な様子だ。

「別に、何も無いよ」

私は首を振った。予想以上に、冷たい声が出た。

「ただ、気をつけた方がいいんじゃない。生徒会選挙って、人気投票みたいなものでしょ？『石の女』みたいに嫌な奴だと、皆から支持されなくなるよ。アキも」

「それ、やめない」

アキは静かに、けれどきつぱりと私の言葉をさえぎった。

「何が？」

「その呼び名。悪意があるだろ。生徒会にそんな名前の人はいないよ」

アキは怒らない。怒鳴らない。そして正しい。

ひどいのは、私だけだ。

「何かあったのだろうけど、めーこに生徒会の仲間をそう呼んでほしくない。……そういう言い方は、自分を貶めると思う」

アキの言葉に、カッと頭に血が上った。

一瞬のうちに、アキに投げつけたい言葉がどつと喉元に押し寄せた。

感情の奔流に、目が眩む。今日のことだけじゃない、今までの、18年分のことが一気に膨れ上がって、アキめがけて爆発しそうだった。でもその濁流は、あまりにぎゅうぎゅうと詰まりすぎて、口から出ることはなかった。

言ってやりたいことがあるのに、それは言葉になる前の塊のまま、喉を塞いでいるだけだ。悔しい。ぐっと握った拳が、ぶるぶる震えた。

でも、負けたくなかった。こんなに怒っているのに、何も言わないまま引き下がりたくない。こんなことですらアキに勝てないなんて、あまりにもみじめだ。

「私、アキの妹じゃなきゃよかった！」

私は詰まった喉をこじ開けて、叫んだ。

言ってから、ああこれは本心だ、と思った。最初に言おうとしたことは違うけれど、これは紛れもない、私の本心だ。

その証拠に、まるで用意されていたようにすると、言葉が続いた。

「あんと双子なんかじゃなきゃよかった！そうすれば、比べられることもなかったのに。みじめな思いをすることなんて、なかった

のに。 私が自分を貶めるんじゃない。 貶められるのは、アキのせいだ」

瞬きをした拍子に、涙がころりと落ちた。

自分がどんな顔をしているか、考えたくなかった。私をじっと見つめるアキの表情は、真剣で怖いくらいだ。アキのこんなに固く険しい顔を見るのは、初めてかもしれない。

「……アキと兄妹なんて、もう嫌だ」

全部言ってしまったから、私は唇をかみしめた。喉のつかえは、もうなくなっていた。かわりにぽっかりと、うつろな穴があいたような気がした。

しんと、部屋に沈黙がおりた。私たちはその間、ただ見つめ合った。何もかも、止まってしまったようだった。

けれどその時間はすぐに、アキによって破られた。

「俺も、そう思う」

ぼつりと言って、アキはぎこちなく微笑んだ。

あの時の笑い方と一緒にだと、私はぼんやり思った。あの、誕生日にペンダントをくれた時。「思い出してほしい」と言った時。

「めーこと兄妹じゃなかったらって、ずっと思ってたよ」

もうそれ以上、聞きたくなかった。私はうつむいて、アキから目をそむけた。

「……出てって」

アキは言われたとおり、静かに部屋を出て行った。ドアの閉まる音だけが、布団ごしに私の耳に届いた。

ぼとぼと、蛇口が壊れたみたいに、涙が止まらなかった。

私は本当に大馬鹿だ。アキを怒らせたのは私自身なのに、どうし

て突き放されたように思っているんだろう。

最初にひどい言葉を投げつけたのは私だ。アキが怒ればいいと思ったのに、怒ったアキにやり返されることを考えていなかったのだと、今更気づいた。

それで見捨てられた、と思うなんて。傷ついて、さみしくなるなんて。本当に馬鹿だ。救いようがない。

俺も、そう思う。

アキの、少しかすれた声が耳によみがえる。

私たちは2人とも、同じことを考えていたんだ。兄妹じゃなければよかった、って。アキもそう思っていたなんて、知らなかった。変なところで気が合うものだ。そういうところはとても双子らしいと、私は鼻をすすり上げて笑った。

1人ぼっちで置いていかれたように、胸がすうつすと冷えた。

11・星の向こうから(1)

泣いて泣いて、いつの間に眠ったのだろう。気づくと私は、夢を見ていた。

夢を見ている最中に、「あ、これは夢だ」と気づくのはとても珍しい。でも、わかった。あまりにも、不思議な世界だったから。

私はアキからもらったあのペンダントを、じっと見つめていた。きらきらと、緑の石の中で光の粒が瞬く。誘いかけるようなそのきらめきを、きれいだな、と思った瞬間、私は溶けていた。

すつと、緑石の中に吸い込まれたのだ。この時点で、ああ夢なのだと思った。夢だから、怖くはなかった。ゆらゆらと濃淡を変える緑の海の中を、深い方へどんどん沈んでいった。

でもこの海は、冷たくもないし、息が苦しくもない。不思議に思って、私は首を傾げた。水の中なのに、溺れないのだろうか。

「水じゃないよ。前に、新緑だつて言っただろ」

呆れたような声がして、私は振り向いた。

そこには、アキがいた。アキは片手を上げて、何かを掴むような動作をした。そしてすいと音もなく私に近づくと、ほら、と手を開いてみせた。

アキの掌の上に、つやつやした若い葉っぱが1枚乗っていた。

私はその葉っぱとアキを交互に見比べて、これは夢だ、ともう1度思った。

なぜならアキの姿が、いつもと違うからだ。

「アキ、なんでそんなに、小さいの？」

目の前にいるのは、子どもの頃のアキだった。

何歳くらいだろう。今よりずっと線の柔らかい、目のくりつとした可愛い顔が、とても懐かしかった。格好も子どもの時のもので、私は思わずにやっとした。半ズボンに、キャラクターもののシャツを着たアキなんて、今じゃ絶対に見られないだろう。

アキは子どもの姿に似合わない、大人びたため息をついた。

「……自分のこと、よく見てみて」

「え？」

言われて私は、慌てて自分の姿を見下ろした。そして本当に、驚いた。

いつの間にか手も足も、小さくなっている。おまけに着ている服は、クマのアプリケがついた、ピンク色のワンピースだった。小さい頃の、お気に入り服だ。これしか着たくないと言って、お母さんを困らせた。

「嘘、私もちっちゃくなってる」

途方に暮れて、私は両手で頬を押さえた。そういえば、声も高く幼くなっていて、今の私のものとは違う。戸惑う私に、アキは苦笑した。

「めーこが子どもだから、俺は合わせただけだよ。……本当、変わらないな」

しみじみ言われて、私はちよつとムツとした。

こんな子どもの頃から変わらなと言われても、嬉しくない。全然成長していないって、言われているのと同じだ。まるでアキばかり、大人になったような言い草だ。

「今は、アキも同じ子どもでしょ。威張らないでよ」

「威張ってなんかないよ。さあ、もう緑の道を抜ける」

アキは上を振り仰いだ。私もはつとして、周りを見回した。

気づけば緑の世界はぐつと深く、濃くなっていた。

もう間もなく、いつそう深い黒へと行きつくのだろう。けれど、

暗くはなかった。あの光の粒がまばゆいばかりに増えて頭上を覆い、はるか遠くまで輝いていた。

なんて星の明るい夜だろう、と思った。

「すごい」

口を閉じるのも忘れて、私は美しい星空に見入った。

ぐるりと見渡す限り、さえぎるもののない星空だ。プラネタリウムよりもすごい。あまり見つめてみると、宇宙へ投げ出されてしまいそうだ。

圧倒されてふらつく私の手を、アキが掴んだ。温かいその手を、私にもぎり返した。

吸い込まれそうな空から目を離して、隣を見た。アキが穏やかに笑っている。

私もなんだかほっとして、笑い返した。美しすぎる星空が、少し怖くなっていたけれど、アキというから大丈夫なんだろうと思えた。

ふいに、アキと手をつないで星を見上げることが、初めてではないと思い出した。

いつかもこうして、2人で星空を見ていた気がする。1度だけじゃない、こんなことがたくさんあった。アキがいつも、私に見せてくれたのだ。皆には内緒だと言って、特別に。

「……アキ」

「なに？」

「星、すごくきれいだね」

アキはふつと微笑んだ。

「うん。きれいだね」

「これ、アキがやったの？」

「うん」

アキは何でもないというふうに、あっさり頷いた。

私も知っている。今更、驚くようなことでもない。アキはそうい

う、「不思議」をもっているのだ。

どうしてそうなのか、私はその理由も知っている。

「アキはさ、」

私は星空を指差した。

美しく瞬く星。その彼方。

「あそこから、来たんだよね」

「そうだよ」

アキは当然のように、静かに頷いた。

思い出した。

遠い昔、小さい頃、アキが打ち明けてくれた内緒話。

「僕はね、実は 向こうから来たんだ」

そう言ってあの日、アキは夜空を指差した。

アキの指差した先が、私にはよくわからなかった。きょとんと首を傾げて、聞き返した。

「向こうって、お星さま？」

「うん、ずっと遠くから。あのね、お船に乗ってふわふわ浮いて、この家に来たんだ」

「すごい！」

絵本みたいだと思って、私はわくわくした。星くずが宝石のように輝く海を、アキと私が大きな帆船に乗って冒険するところを想像して、胸が躍った。なんて素敵で、楽しそうなんだろう！

「ねえねえ、私も一緒に来たの？アキと一緒に、お船に乗ったの？」
勢い込んで、私は聞いた。双子なんだから、当然そうだろうと思った。

けれど、アキは目を伏せて首を振った。

「うつん、僕だけだよ。僕だけ、1人で……避難してきたんだ」
だから僕はね、仲間はずれなんだ。そう言っつて、アキはぐつと口元を引き結んだ。

楽しい冒険をしたという表情ではなかった。むしろ悲しそうなそれをじつと堪えるような表情だった。見ている方の胸が、きゅつと締め付けられてしまいそう。

アキはさみしいのだろうか、私はその時思った。だからつないだ手を、ぐつと強く引っ張った。

「じゃあ、今度は2人ね。アキ1人でお船に乗るのはずるい。あたしたち、双子でしょ」

私もいるよと、言いたかったのだ。1人ぼっちでさみしい時は、につこり笑って手をつないで、一緒に遊ぼうと言ってもらえるのが、1番嬉しい。それを私は、アキから教わっていた。

アキは少しびっくりしたように目を見開いてから、弱々しく笑った。

「めーこ、話聞いてた？だから、僕たち本当は、双子じゃないんだよ」

私は聞こえないふりをした。

「でも今は、双子でしょ？　ハイ、もう決まり。決まったから、変更はナシ。文句言ったら、遊んであげないからね」

一方的に決めつけた私に、アキはあっけにとられたようにぽかんとした。そうして、ぷつと吹き出した。

「……そういうの、『横暴』っていうんだよ」

「いちいち難しいこと言わないでよ。ム力つくなあ」

私は唇を尖らせた。でも、アキに明るい笑顔が戻って、本当にほつとした。

そして、アキが悲しくなることなら、この話はやっぱり内緒にして、忘れてしまおうと思ったのだ。

12・星の向こうから(2)

全部、思い出した。

アキは静かな表情で、私を見ている。遠い日の記憶にあるような、悲しさやさみしさは、その顔には浮かんていなかった。

これが、アキの思い出してほしいことだったのだろうか。

「……私、思い出したよ」

小さく呟くと、アキは頷いた。

「うん。……ありがとう」

ふいに、胸の中を冷たい風が通り抜けたように、さみさがこみ上げた。

今、隣にいるアキが、ひどく遠い。手をつないでいるのに、宇宙の彼方に離れていってしまったかのようだ。星明りに照らされたアキの表情が、ひどく静かだから、そう思ってしまうのだろうか。

よみがえった思い出と、さきほどの喧嘩のことで、心が押しつぶされそうだった。

……私は、さっき、何てことを言ってしまったのだろう。

「アキ、ごめん」

泣きたくはなかったけど、にじんでくる涙を抑えることができなかった。

「ひどいこと言ってごめん。嘘だよ。アキが嫌なんじゃないよ」

小さい頃みたいに、落ちる涙を掌で下手くそにぬぐった。

たぶん私は今ぐしゃぐしゃで、みつともない顔になっているんだろう。でも、構わなかった。どうせ、今は子どもなんだ。我慢するのも、取り繕うのもやめた。

取り繕おうとする前に、アキにちゃんと言わなきゃいけないことがある。

「比べられるのだって、本当は、アキのせいじゃないのに。八つ当たりしてごめん。本当は全部、私の問題なのに。私がつと、ちゃんとしていればいいだけなのに」

比べられるのが嫌だと言いながら、常に引き比べて嫉妬していたのは、私自身だ。何の努力もせずに、ただ拗ねていた。自分の怠惰を、アキのせいにしていた。

大馬鹿な自分が情けなくて、悔しくて、涙が止まらなかった。

アキは、少し困ったような顔をして笑った。

「……無理、しなくていいよ」

とても優しい声だった。

「俺と兄妹じゃなきゃよかったって、あの言葉、嘘じゃないんだろ？」

アキの声には、責めるような響きはなかった。だから私は、いつそう何とも言えなかった。

そうだ。あれは確かに、嘘じゃなかった。

幼い頃、双子なんだと力強く宣言したことも忘れて、私はアキと兄妹でいることが嫌になっていた。いつからか、アキさえいなければと、そう心の底で考えるようになっていたんだ。

醜いその心を、アキはずっと、見抜いていたんだろう。

「それに俺も、そう思いつて、言っただろ。あれも、嘘じゃないよ」

なぐさめるような口調なのに、なぜだか私は、突き放されたように感じた。柔らかいけれど決して破れない壁を、今、私たちの間に作られたような気がした。

私は、いつかと同じように、つないだ手をぐつと強く引いた。

兄弟じゃないし、お互い良かったね。そう言つて、アキが星空の向こうへ遠ざかっていってしまいそうに思ったのだ。だから、振り払われる前に、その手をぎゅつとにぎった。

「嫌だ」

べそべそ泣きながら、私は首を振った。

「私、もつとちゃんとする。強くなる。比べられても、気にしないって、揺らがないようになる。八つ当たりもやめる。だから」

どこにも行かないで。

続けようとした言葉は、嗚咽に邪魔されて、かき消えた。

私はそれ以上、しゃべることができなかった。本当に子どもに戻ったみたいにな、つないだ手にすがって、声を上げて泣いた。

アキの手の感触が消えた。と思ったら、ふわりと両肩が温かいもので包まれた。

「なんだ。思い出したんじゃないの？」

びつくりして目を開けると、すぐ目の前にアキの肩があった。水色のラインが入った、小さい頃のシャツ。よく知っている、アキのにおいがした。

アキの手がぽんぽんと、優しく私の背中を叩いた。まるきり、小さい子をなだめて寝かしつける手つきだ。同い年のはずなのに、完全に子ども扱いされている。

すぐ耳元で、アキはふつと笑ったようだった。

「ずっと一緒にいるって言ったよ。そのことも、思い出してほしかったのに」

よしよし、と頭をなでられて、私はアキの肩に濡れた目元を押しつけた。

「でも、アキは嫌なんでしょう。……私と一緒にいるのが」

「そういう意味じゃないよ」

アキは少し身を離して、首を傾けて私の顔を見た。

片方の口の端だけつり上げて、アキは笑っていた。どこか自嘲的なその笑みは、アキには珍しいと感じた。

「兄妹じゃなきゃいいって、俺のは、……めーことは意味が違う。」

思い出してほしかったのも、それをちゃんと、めーこに知っておいてほしかったからで……俺の勝手な都合なんだよ。ごめん」

「なんで謝るの」

私はぐすぐす鼻をすすった。アキの言っている意味がよくわからなかった。私とは意味が違うつて、どういうことなんだろう。

アキは親指で、私の目じりの涙をぬぐってくれた。

「俺と比べられている言われるのが嫌だつて、それがめーこの問題なら、兄妹が嫌だつてというのは俺の問題だよ。めーこのせいじゃない。……悲しくさせて、ごめんね」

「じゃあ、アキはどこにも行かないね。私たち、ちゃんとこれからも兄妹だね」

これからも一緒にいるよねと、私はちゃんと確認したくて聞いた。

アキはあつけにとられたように、ぽかんと口を開けた。めったに見ることのない、とても間抜けな表情だ。

「本当に、変わらないなあ、めーこは」

呆然とそう言つて、アキは大きなため息をついた。

「もう18歳なのに。全然話を聞かないところ、小さい頃のままだ」
ゆっくり首を振つて、アキは仕方ないなあというふうに、柔らかく笑った。諦めたというより、やれやれ、と許すような笑顔だった。私はほっとした。何を呆れられて、許されたのかわからないけれど、少なくともアキは私を嫌いになつたわけじゃない。それだけはわかった。

「今はもう、それでいいよ。お互いこれからがんばるってことで。」

次はこういう、子どもの姿はナシだね」

そう肩をすくめて、アキは空を振り仰いだ。降つてきそうな星空の、どこを見たんだろう。まるで壁の時計でも見たというような気軽さで、さらりと言った。

「さあ、もう休まないよ。明日、学校に遅刻するよ」

いきなり現実的な言葉が出てきて、私は面食らった。

「えー、嫌だ。明日絶対、ひどい顔になってる」

私は慌てて、手でごしごし顔をこすった。この夜だけで、もう1年分くらい泣いた気がする。明日どんなことになってしまうのか、考えるだけで恐ろしかった。

「それは、しょうがないよ」

アキは苦笑して、私の手を引いた。

ふわりと、また抱きしめられる。馴染んだアキのにおいと、安心する温かさに、私は目を閉じた。

耳元で、アキがささやく。子どもじゃない、18歳の、アキの声だった。

「おやすみ」

13・朝

朝起きて、鏡を見ると案の定、まぶたが腫れ上がっていた。

「うげー、最悪……」

学校の皆に何と言われるだろうと考えて、私はうめいた。特に仁美には、絶対に誤魔化せないだろう。何があったのかと、しつこく聞かれるに決まっている。……先生に大目玉を食らうリスクを冒して、化粧をいつもより念入りにすれば、少しはマシだろうか。

せめてもと、学校へ行くまでの間、濡れたタオルで目元を冷やすことにした。

手早く制服に着替えて、鞆に教材をつめた。いつもの朝なら、寝起きでぼーっとしながらゆっくり準備をするけれど、今日はその時間が惜しい。冷たいタオルを目に当てて、そのまましばらく、椅子に座ってじっとしていた。少しでも長く冷やして、顔をいつも通りにしたい。

いい加減に朝ご飯を食べなきゃいけない時間になったので、私は立ち上がった。そのときふと目の端で、何かがきらりと緑色に光った。

ペンダントだ。

「……」

しばらく考えて、私はそのペンダントを手にとった。

制服の下に隠せば、誰にも見つからない。校則違反だとしても、外に出しさえしなければいいのだ。

ふっと小さく笑って、チェーンを外して首に通す。顔のむくみのせいで最低なテンションが、1段だけ上昇した。

居間ではモト兄が、あくびをかみ殺しながら新聞を読んでいた。

「おはよう」

声をかけると、言葉ではない、眠そうなり声が返ってきた。けれどこちらをちらりと振り向いたモト兄は、私の顔を見て、眠気が吹っ飛んだように目を丸くした。

腫れたまぶたをまじまじと見つめられ、私は居心地が悪くなった。モト兄は私の顔から、きちんと用意の済んだ鞆と制服に目を移した。そうして、ふむ、と考え込むような顔をした。

何か、言われるだろうか。密かに身構えたけれど、それは杞憂に終わった。モト兄は肩をすくめて、「おはよ」と軽く返してきただけだった。

テーブルについて、用意された朝食を食べる。私がパンを食べるその間に、お父さんとモト兄は会社に行き、お母さんは町内会のゴミ出し当番に出て行った。そうして私が食べ終わる頃、アキがジョギングから帰って来た。

アキはいつもと何一つ変わらなかった。気まずそうな顔をすることも、つんと無視することもない。私の顔を見て、明るく笑って言った。

「おはよう」

ごく当たり前の、普段の挨拶だ。朝から眩しいほどのその笑顔に、私はなんだか肩の力が抜けた。

それでも、ちょっと緊張していたんだ。昨日の夜の喧嘩とか、夢の中でのこととか。何か言おうと思っていたけど、やめた。一人で悩むのも馬鹿みたいだ。

代わりに私は、席を立てて尋ねた。

「何か飲む？」

「うん」

アキは短く答えて、お風呂場の方へと消えて行った。

その間に、私はやかんを火にかけて、準備をする。食器棚からマ

グカップを1つ取り出して、コーヒーのドリツパーをセットした。アキの好きな豆の量は、もう、手が覚えている。

お湯が沸いて、いくらも待たないうちに、制服を着たアキが居間に戻って来た。

毎度ながら、呆れるくらいにシャワーと着替えが早い。カラスの行水って、こういうことを言うんだろう。アキが言うには、1度運動部に入った奴は皆こうなるのだそうだ。……本当なんだろうか。

私はお湯を注いで、コーヒーをいれた。同時にアキは、黙ってコップをもう1つ取り出すと、牛乳を注いだ。

そうして互いに用意した飲み物を、私たちは何も言わずに、ごく自然に交換した。

私はアキがついだ牛乳を、アキは私のいれたコーヒーを飲む。拍子抜けするくらい、いつもの朝だった。

ふと急に、くすぐったいような笑いがこみ上げてきた。私はコップを両手で持ち上げて飲むふりをしながら、こっそり顔を隠した。

嬉しいなんて、別に、言う必要もないだろう。

こうして一緒にいることは、何も特別なことじゃない。私たちは双子の兄妹、家族なのだから。

おまけ・魔法使いと天の邪鬼

休日は昼まで寝ているに限る。

仲間とわいわい遊びに行くのも好きだが、幸い俺は1人でも退屈しない質だった。何もしくなくとも、自分の時間というものはいい。ぼーっと煙草を吸っているだけで、リラックスして頭がすっきりする。

そういうわけで、俺はこの貴重な休日を、のんびりと家で過ごしていた。パチンコにでも行こうかと思っただが、今月の懐具合を思い出してやめておいた。誰もいない家は広くて心地いい。両親は仲良く映画、弟は生徒会で学校、妹は友達と買い物に行っている。この隙に、久しぶりの1人を満喫しない手はない。

ソファーに腰を掛け、ラジオを小さくつけて、読んでいなかった雑誌をめくる。自然と口元が緩んだ。ささやかだが、こういう潤いは大切だと思う。

気楽な実家暮らしだが、こうして家で好きに過ごせることはなかなかない。仕事であまり家にいないということもあるが、なにしろ長男なもので、いつもは座り心地のいいソファーもラジオのついたオーディオも、弟と妹に譲っているのだ。

俺には5歳違いの双子の弟妹がいる。

「兄貴だから」とあれこれ我慢させられることに反発を覚えたのは、もうずいぶん昔までだ。年の差もあるから、今では余裕をもって大概のことは流せるようになった。まあ、弟妹に迷惑をかけられたことはほとんどないが。それに俺の方も、兄貴として立派なことをしてやった覚えはない。

弟も妹も、兄に面倒をかけない、良い子たちなので。

「ただいま」

玄関の扉が開く音で、つい真剣になって雑誌を読んでいた意識がふと浮上した。

聞こえたのは明彦の声だ。俺は意外に思っ、時計を振り仰いだ。

「おう。ずいぶん早いな」

まだ時計は4時にもなっていない。生徒会の集まりがある時、明彦は大抵帰りが遅いから、こんな中途半端な時間に帰ってくることは珍しかった。

「うん。そんなにやることなかったから、早く終わった」

明彦は居間に入ってくると、ネクタイを緩めて前髪をかき上げた。この弟は、そういう仕草が嫌味なほど様になる。

「お疲れ」

俺は雑誌を閉じた。まだ途中だったが、読みかけの雑誌より弟の方が優先だ。明彦と2人だけで話すのは、1人の休日よりも久しぶりだった。

俺の弟の明彦は、すごい奴だ。身内の鼻屑目を除いてもそう思う。こいつは勉強も運動も大変できる奴だ。おまけに責任感もあって、生徒会長なんかをやっている。明彦を見てみると、すげえなあ、と俺は素直に感心してしまう。妬む気も起きないくらいだ。

家でも学校でも、明彦は問題を起こすということがなかった。誰とでも上手くやれる奴、なんて俺は都市伝説だと思っているが、明彦を見ているとその存在を信じてしまう。いつも自然に人を中心にいて、笑顔で皆を惹きつける。あいつは子供の時から、ひどく大人びていた。ませているのとは少し違う。対応が大人なのだ。

それは、明彦と明子を並べてみるとよくわかった。明子は小さい頃、癩癧持ちの子供だった。母親も手を焼いていたのに、明彦はなぜか明子をなだめるのが上手かった。明子の癩癧に引きずられるこ

となく落ち着いて話をして、いつの間にか明子の気を上手く逸らしているのだ。傍で見えていて、呆れるほどの手際だった。

男兄弟だし、面と向かって褒めるなんてしたことはないが、とにかく大した奴だ。

明彦は黙って鞆をテーブルに置くと、椅子に座った。ごそごそフアイルを取り出しているその姿を見ながら、俺と会話する気はあるかな、と考える。

自分が18の時の感覚は薄れてしまつてわからないが、家族に声をかけられるのも嫌な時期というものが、誰にでもあるからだ。このくらいの年頃の男にとっては、兄なんぞ目の上のたんこぶでしかないだろう。

明子には感じない逡巡を、明彦には感じる。俺は近頃この弟との距離を、いまいち計りかねていた。

作業を始めた明彦の邪魔になるとは思いつつ、俺は声をかけた。めったにない機会だから、ウザい兄貴になるくらい構わないと開き直った。

「なあ。明子とは、もう仲直りしたのか？」

明彦はプリントをめくる手をぴたりと止めた。怪訝そうな顔をしないで、こちらを振り返る。

でも、そんな顔をして誤魔化しても無駄だ。俺は思わず苦笑した。

「お前らこの間、喧嘩してただろ」

「してないよ。喧嘩なんか」

明彦はふいと目をそらした。その反応に、おや、と思う。ウザい兄貴の好奇心が疼いた。

「明子はかなり、ダメーじくらつていたようだったが？」

「……モト兄には敵わないな」

明彦は一瞬眉をひそめてから、観念したように小さく笑った。

「仲直りというか、一応普通にはなったと思う」

「そりゃ、よかった」

俺が肩をすくめると、明彦は視線を手元のプリントに戻した。もう話は終わりだと思ったのだろう。

だが、甘い。暇な兄貴の詮索をなめるなよ。

「お前ね、18になったからって、ちょっと急ぎ過ぎたんだよ。明子はまだガキだぞ」

今度こそ、明彦が顔を顰めた。

誰にも言ったことはないが、俺の覚えている一番昔の記憶は、病室で母親が赤ん坊を抱いている光景だ。

モトくん、今日からお兄ちゃんよ。

そう言って、母さんが腕の中の赤ん坊を俺に見せる。ピンク色の産着に包まれて、赤いサルのような顔をした女の子が眠っている。手なんかあまりに小さくて、俺は怖くて触ることができなかった。尻ごみする俺を見て、母さんは苦笑してこう言ったのだ。

怖がっちゃ、かわいそうよ。可愛い女の子でしょう。

そう。

18年前、俺にできたのは妹だけだった。

けれどそれ以降の記憶では、明彦と明子の双子がちゃんと存在する。母親に聞いたって、生んだのは双子だと言っただろう。だからこの一番古い記憶は、俺の頭の隅にしかないものだ。

幼い頃のことだから、単なる俺の覚え違いかもしれない。だがそ

うでなくても、今も昔も、俺に双子の弟妹がいることには変わりはない。誰にも言ったことがないのは、この記憶がどうでもいいものだからだ。

「本当、モト兄には敵わない」

明彦がため息をついた。できる弟をやりこめることができて、俺は良い気分で笑った。

「それだけでなく明子は、お前に妙に張り合おうとするところがあるからな」

「……張り合うつていうか、一方的にム力つかれてるだけだね」
明彦が途方に暮れたように頭をかく。

何てことないように言葉は軽いが、目を伏せる様子には根の深い悩みが見えた。

だが本気で困っている明彦には悪いが、俺は微笑ましいなと思ってしまう。

「まあ、せいぜい頑張れや」

俺の軽い言葉に、明彦は少し驚いたように目を見開いた。

「……いいの？俺が、頑張っても」

いいもなにも、と肩をすくめる。そんなの、俺が決めることじゃない。

「お前の好きにしろ。……でも、全部お前の思い通りにいくかどうかは、わからんぞ」

まずは明子の気持ち次第だ。それ以外にも実際こいつには、越えなければならぬ障害は多いだろう。軽い警告のつもりで言った俺に、明彦は口の端だけで笑んだ。その目の奥が、きらりと光ったような気がした。

「そんなの、全力をつくすだけだ」

こんなすごい奴の全力とは恐ろしい。だが明彦らしい自信に満ちた言葉に、俺は小さく笑った。

難儀な双子だ、と思う。

お互いに、コンプレックスに縛られているように思うのだ。明子の劣等感はともわかりやすい。さすがに癩癩を起こすことは少なくなっただが、あいつは嫉妬すると、すぐに態度に出る。その後到自己嫌悪するところも、劣等感を抱くくせに明彦と一緒にいたがる甘えたれなところも、昔から変わらない。

だがコンプレックスは、決して一步通行ではないのだ。明彦のそれは明子より見えにくいだけで、確かに存在している。この間、誕生日に明子へネックレスを贈ったことなんか、少し表れていると思う。明彦は、自分が明子に最も影響を与える存在だと自覚しているし、その位置を誰にも譲るつもりはないのだ。

そしてどうやら18歳になったのを期に、より明子を独占できる位置に、動き出そうとしているようだった。

そのことに関して、俺は別に反対はしないし、積極的に協力することもない。

立派じゃない兄貴はただ見守るだけだ。明彦と明子がこれから、何をどう選ぶかは俺が決めることじゃない。あいつらの自由だ。

魔法使いのような弟は、天の邪鬼な妹の心を解きほぐすことができるのか。見ものだと思ってしまうあたり、やはり俺は気楽な傍観者でしかないのだろう。

別にどうなろうと、俺が2人の兄貴だということに変わりはない。どちらも俺にとっては、可愛い弟と妹なのだから。

だけど、弟と妹が兄妹以上の関係になったら、さすがに一つ屋根の下の家族としては気まずいかもしれない。

「……俺、家を出て独立しようかな」

ふと俺が呟くと、明彦は目を丸くした。

「え、どうして？」

「まあ、長男だしな。そろそろ、自活能力もつけようかと」

曖昧に誤魔化すと、明彦はピンとこなさそうに、ふうんと頷いた。
「めーこが寂しがるよ、モト兄がいなくなると」

そうだろうか。1つ部屋が空いて、喜んで物置部屋を作る母と明子の姿しか、俺は思い浮かべることができない。

「お前はどうか、寂しいか？」

聞くと、明彦はにっこり笑った。

きつと女なら赤面するんだろうと思うくらい、完璧な笑顔だった。

「早く出てけよ、クソ兄貴」

爆笑した。さすが、俺の弟だ。

おまけ・魔法使いと天の邪鬼（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0214q/>

野田さん家の3兄妹

2011年2月1日00時41分発行